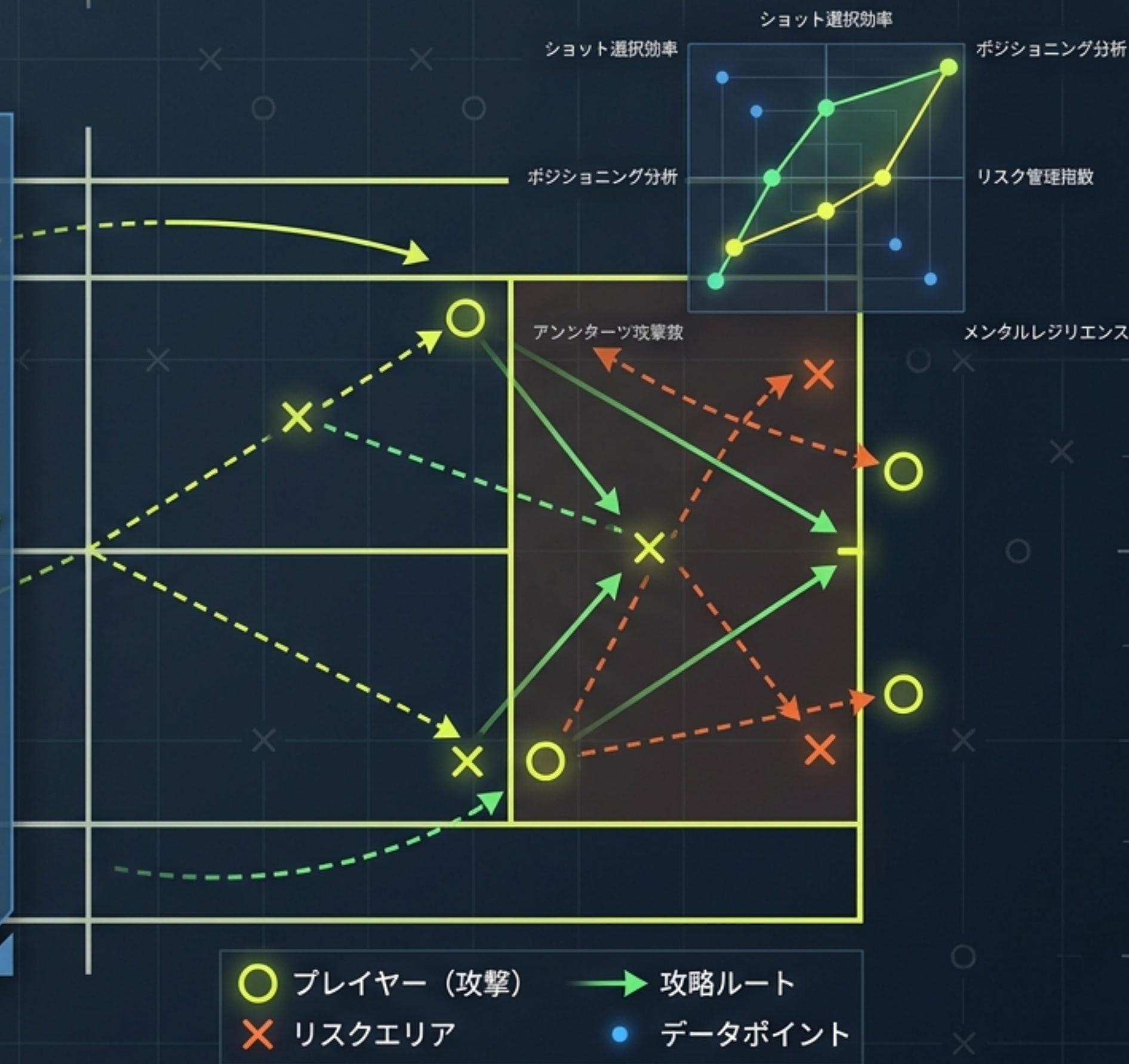


勝つための戦術 的プレイブック

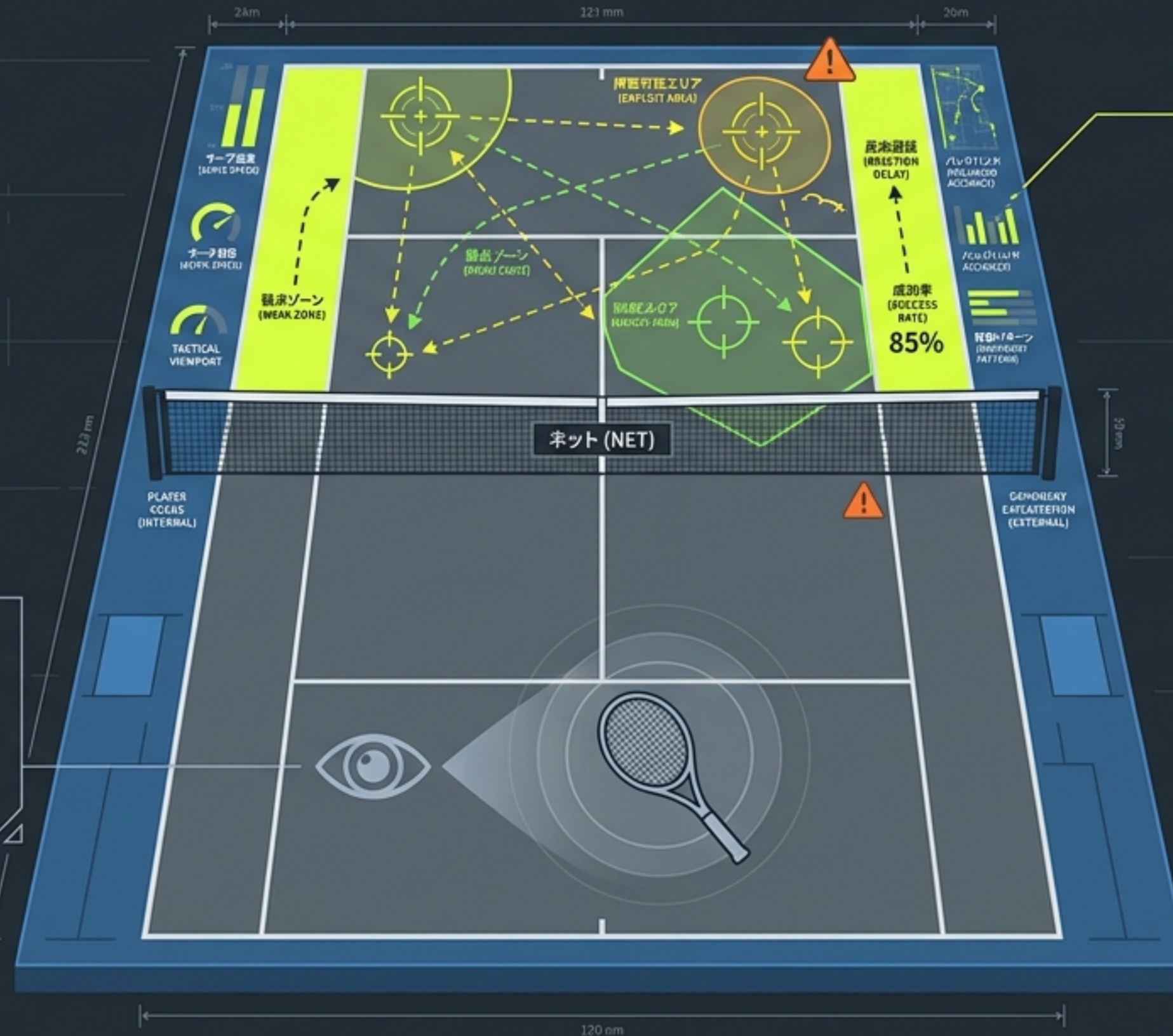
伝説的コーチ、ブラッド・ギルバート
に学ぶ「勝者の思考法」

アガシ、ロディック、ガウフを導いた独自の
戦術、データ活用、メンタルマネジメントの
極意を体系化。スポーツとビジネスの枠を超
える、実践的な戦略フレームワーク。



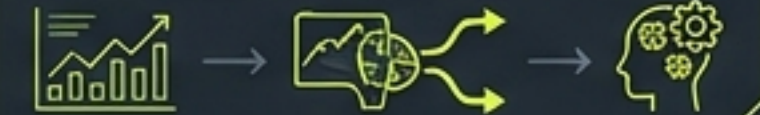
視点を「ネットの向こう側」へシフトする

The Modern Tactical Playbook – Strategic Shift.



ギルバートの視点： 相手の弱点の榨取

勝つための絶対条件は、視点をネットの向こう側に移すこと。相手が何をしようとしているのか、その強みと弱点をデータに基づいて把握し、自分の強みを最大化するための「相手軸」の戦略を構築する。



一般的な視点：自陣への固執

多くの選手は、自分のフォームやショットの出来など「自分が何をしているか」にのみ執着する。



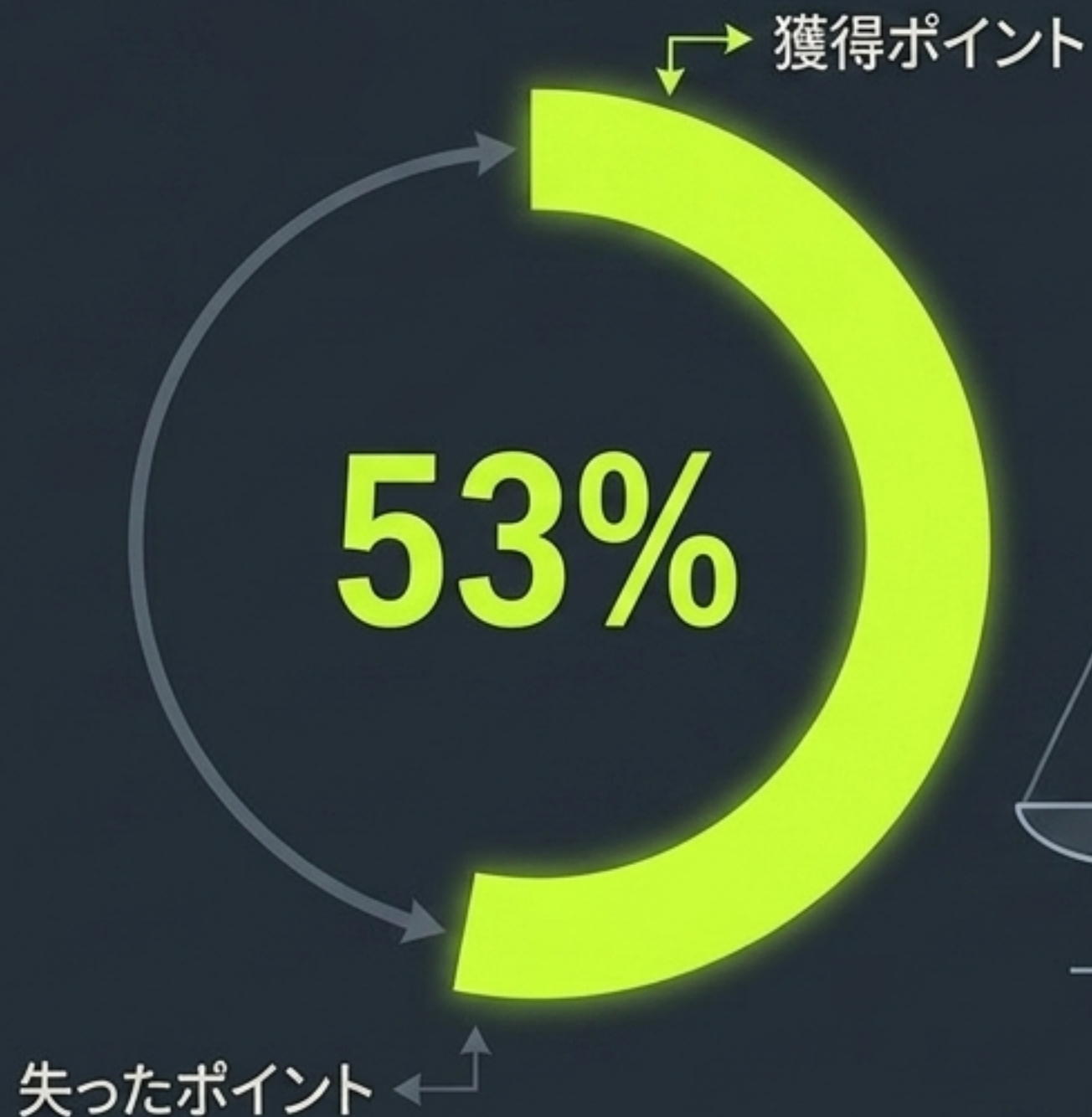
伝説を創る「53%」の法則

The Modern Tactical Playbook – Strategic Shift.

史上最高の選手の一人であるロジャー・フェデラーでさえ、キャリアを通じて獲得したポイントは全体のわずか「53%」に過ぎない。その差はわずか6%の-margin。

実際の試合では、勝敗を分けるのは全体の中で「5~7ポイント」程度に集約される。

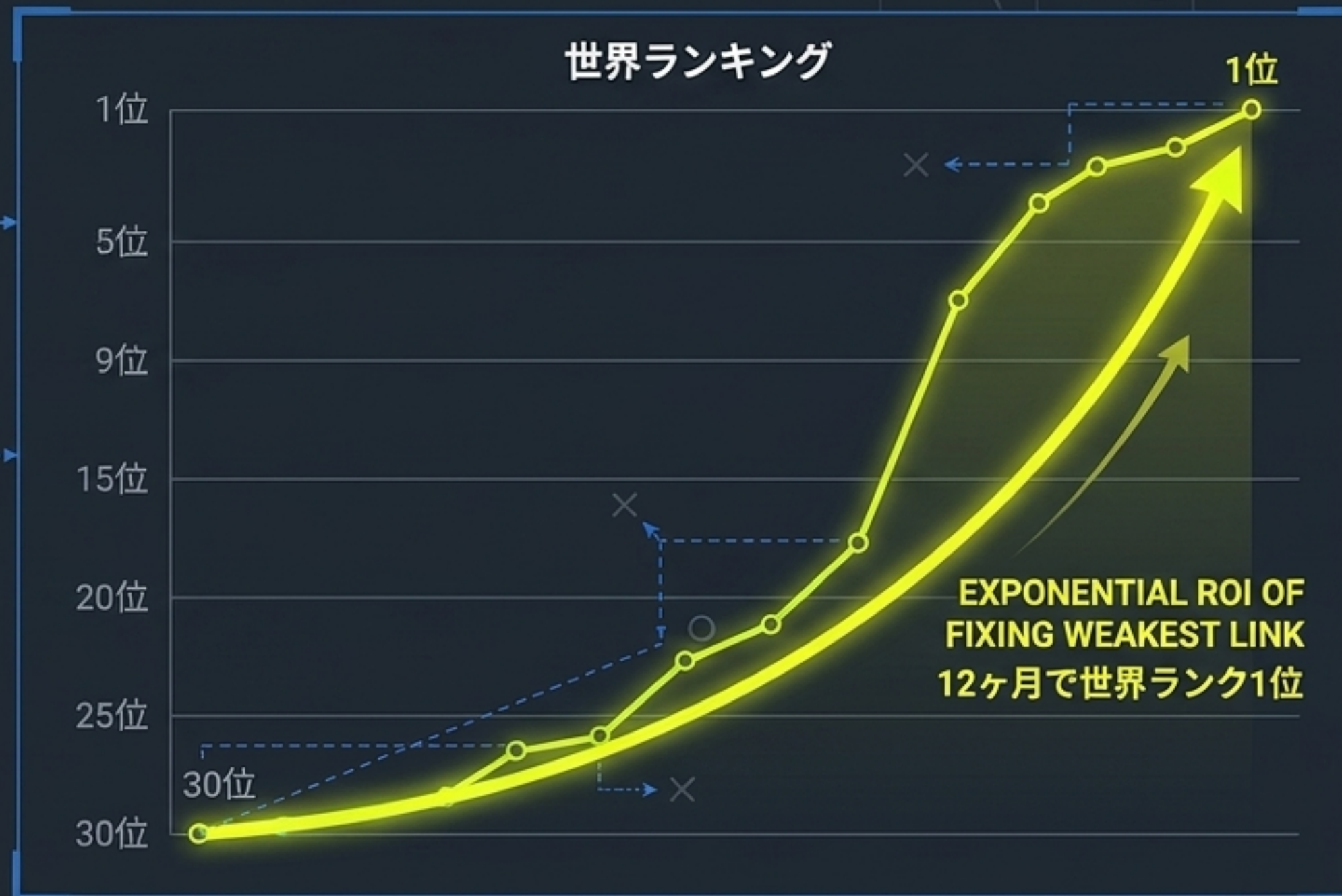
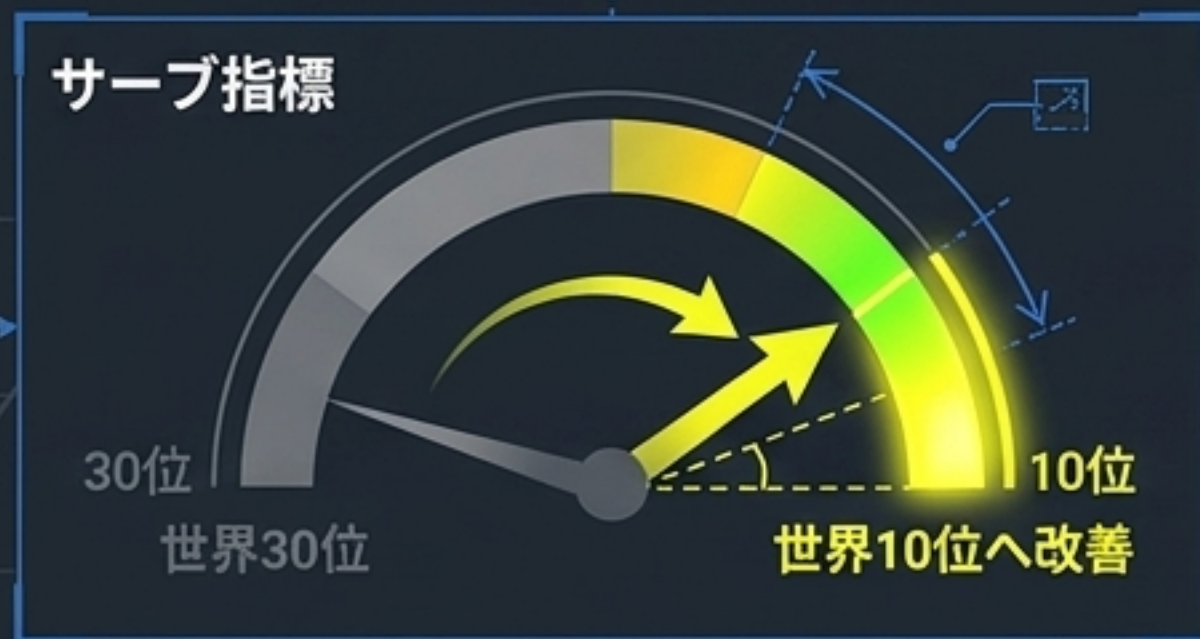
圧倒的な勝利は、完璧なプレイからではなく、このごく僅かなmarginを確実にもぎ取る計算から生まれる。



弱点の底上げがもたらす巨大なリターン

The Modern Tactical Playbook – Strategic Shift.

得意なリターンをさらに磨くのではなく、サーブ指標を「30位から10位」へ引き上げることにのみ注力。
プレースタイルを変えることなく、わずか12ヶ月で世界ランク1位へと駆け上がった。

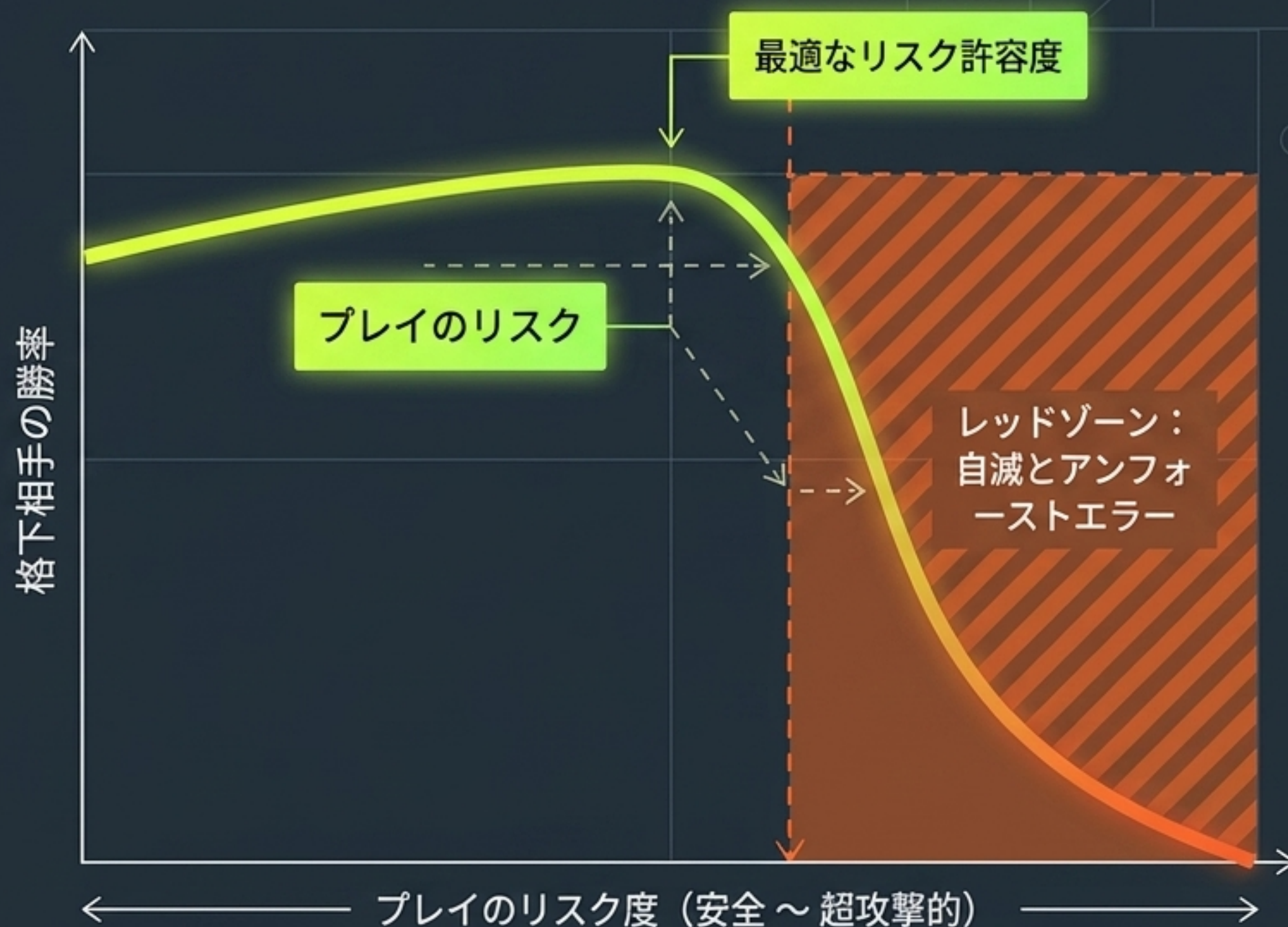


過剰なリスクが格下に勝機を与える

The Modern Tactical Playbook – Strategic Shift.

圧倒的な実力差があるにもかかわらず、リスクを取りすぎることで、自ら格下選手に勝つチャンスを与えてしまう。相手にプレッシャーを感じてミスをする機会を与えるため、リスクを管理することが真の強さである。

リスクと報酬のパラドックス



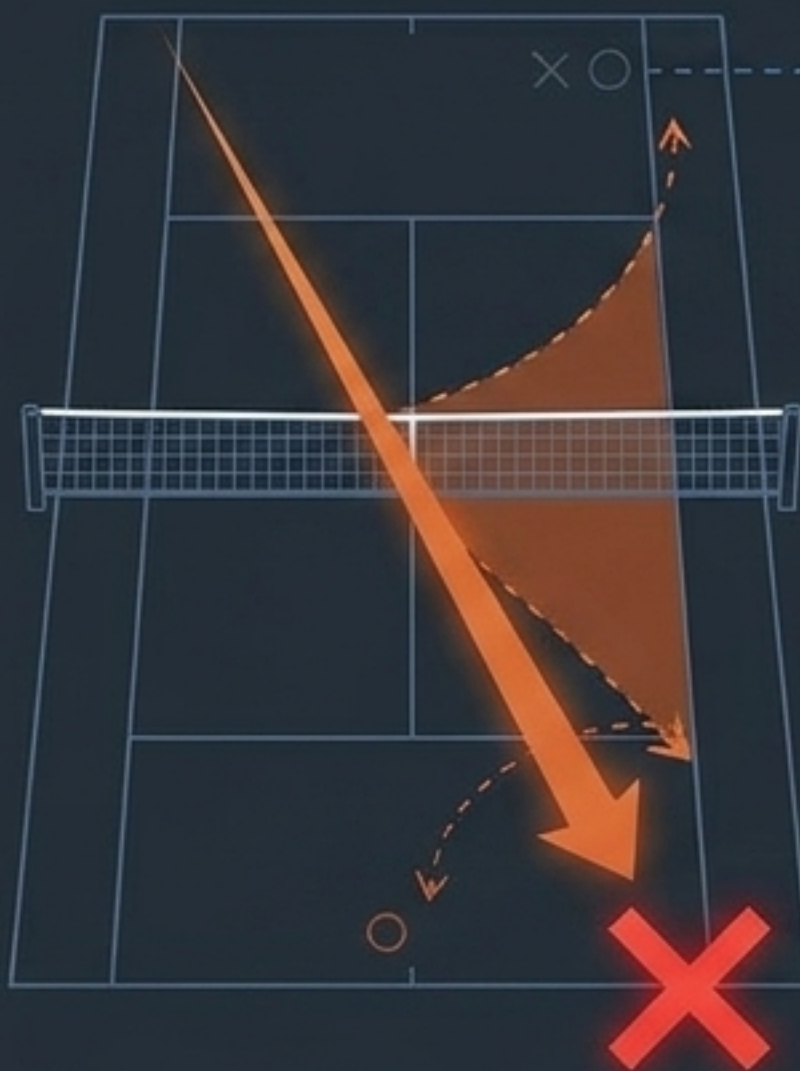
勝負を決めるのは「美しさ」ではなく「有効性」

仏リヨンでのカロール・クチュエラ戦。強打をカウンターされ苦戦するアガガシに対し、ギルバートは「コート中央に山なりのボールを打て」と指示。

自らペースを作れない相手はミスを連発し、瞬く間にスコアを圧倒した。

「こんな勝ち方はクソだ」と不満を漏らすアガシに、ギルバートは「それこそが我々が求める勝ち方だ」と答えた。

パターンA：美しく危険な強打



カウンターリスク大

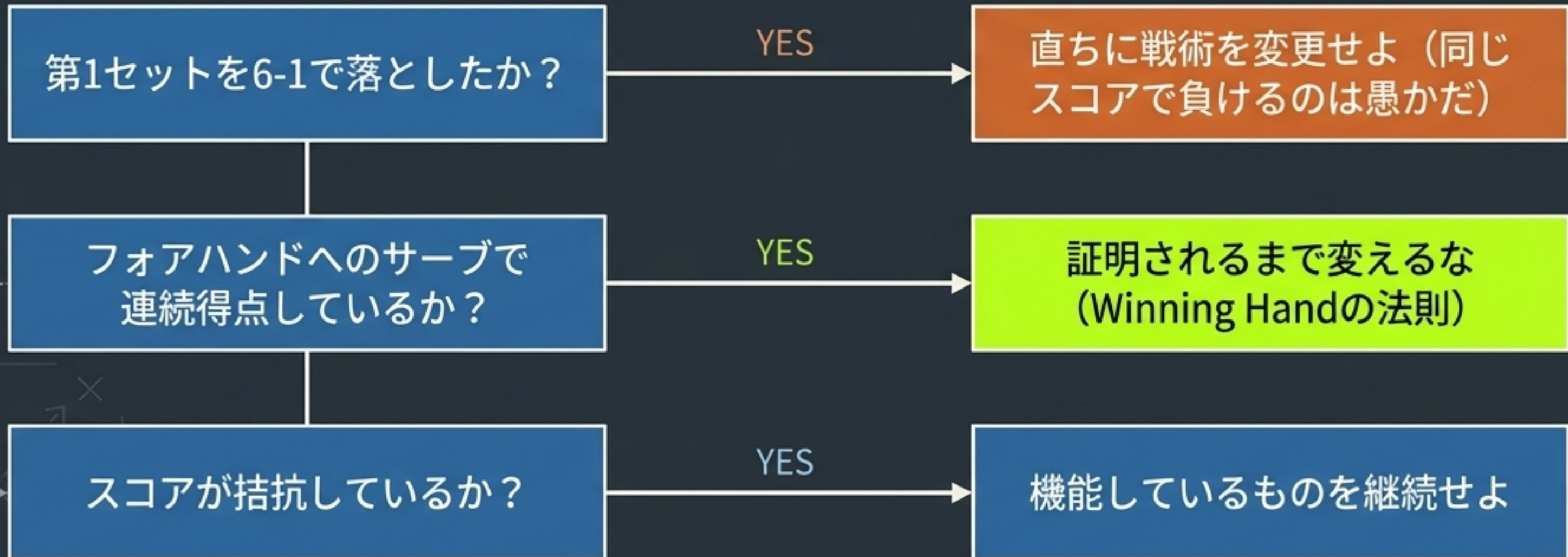
パターンB：不格好で有効な山なりの球



11分間で20対1のスコアを獲得✓

状況に応じた「適応決定ツリー」

優れた計画も、状況次第で破棄する柔軟性が求められる。うまくいっている戦術は無闇に変えてはいけませんが、機能していない場合は意地を張らず即座に代替プランへ移行する。



極限の重圧下では「基本」へ回帰する

敗北への恐怖ではなく、
「プレッシャーの中で自分の最大の強みを発揮できないこと」を恐れるべきである。

勝負の分かれ目となる重要なポイントにおいてこそ、特別なことをしようとするのではなく、スコアの重圧から自分を解放し、最も得意な基本戦術を徹底する。

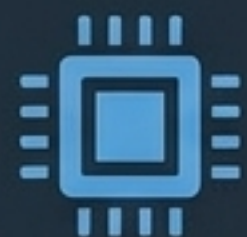


相手に応じたコミュニケーションの最適化

「私自身のコーチングスタイルというものは存在しない。
私のスタイルは、今コーチしている相手そのものだ。」

情報の処理能力やストレス耐性は個々人で全く異なる。相手がどのように機能し、どう感じるかに共感（エンパシー）し、伝え方を根底から適応させることがリーダーの条件である。

情報処理型（例：アガシ）



17ラリーの全ショットを記憶



前夜に3時間の戦術議論

直感・反発型（例：ロディック）



戦術指示は最大20秒



逆心理を利用した指示

頑固さは武器だが、柔軟性の欠如は命取りになる

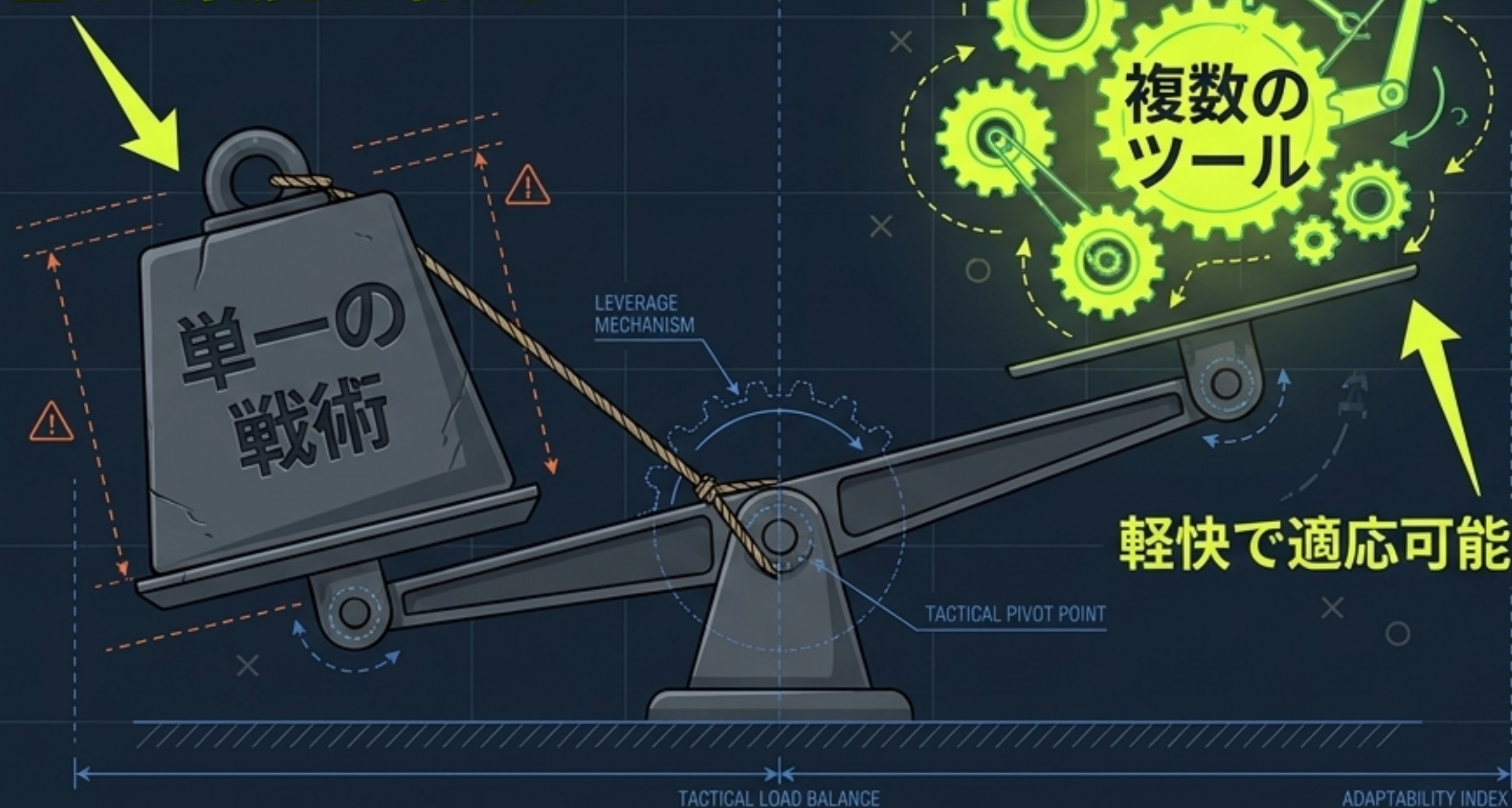
柔軟性の重要性

1つの戦術しか持たない場合、自分の調子が絶好調であることを「析る」しかなくなる。

真の才能とは、状況に応じて立ち位置を変える柔軟性を持つこと。

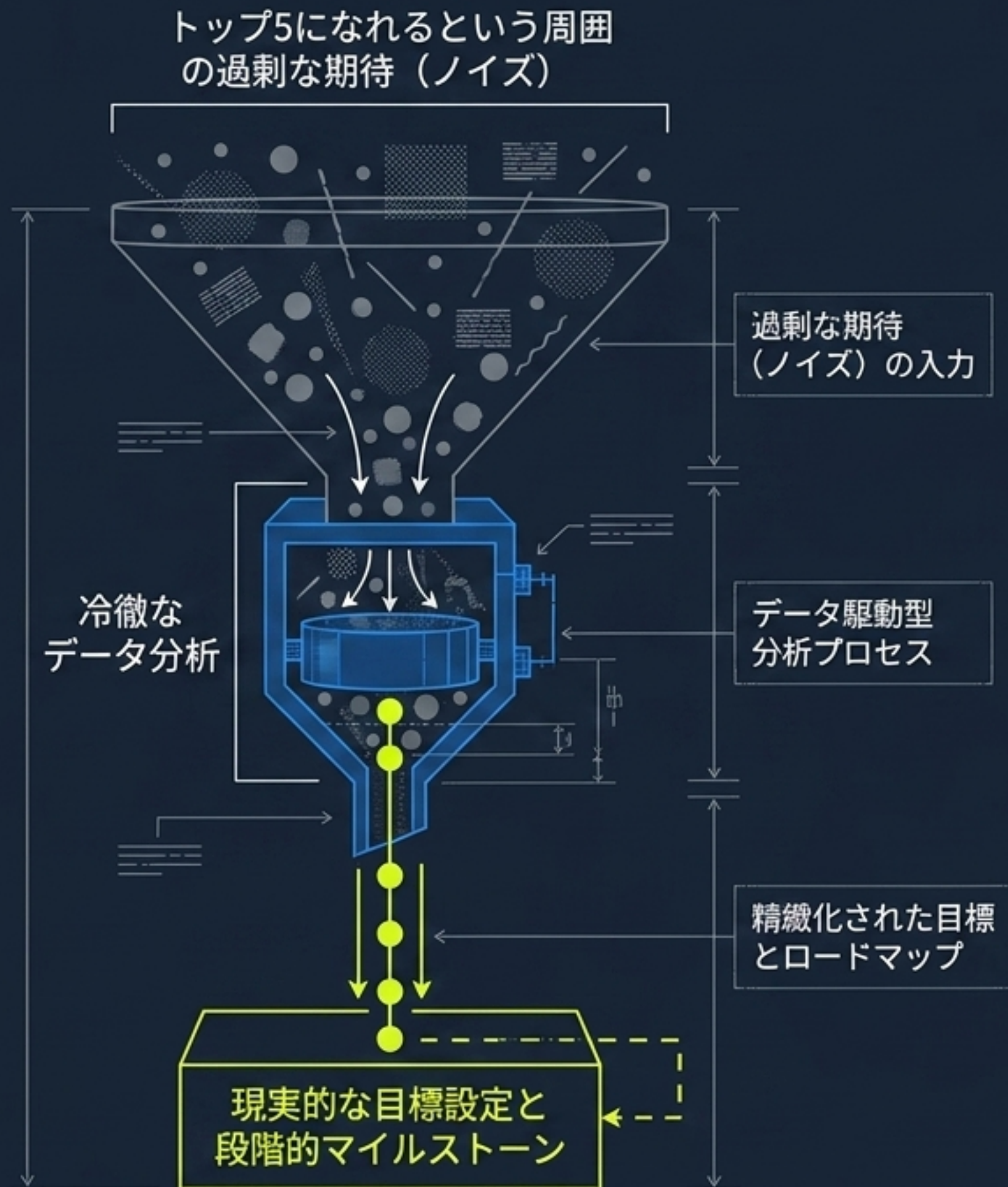
多様なツールを持っているという安心感こそが、コート上での平常心を生み出す。

重くて身動きが取れない



才能の評価と「残酷なまでの誠実さ」

誰もが安易に成功を口にするが、コーチに必要なのは相手を喜ばせる嘘ではなく、現状を冷静に見極め、現実的なマイルストーンを提示する「残酷なまでの誠実さ」である。



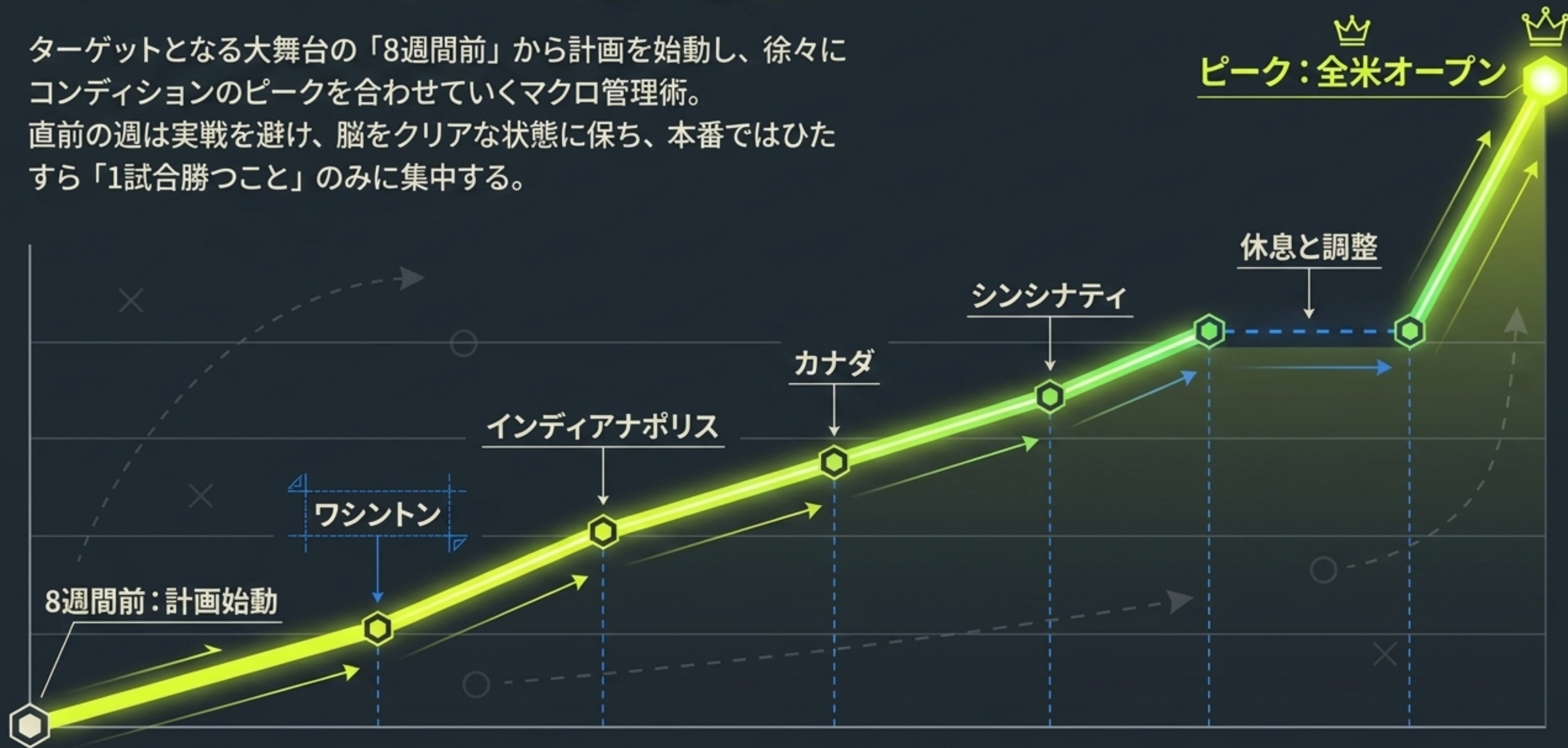
その夢は「誰のもの」か？

才能と努力の組み合わせは不可欠だが、最も重要な無形資産は「競争への純粋な情熱」である。
親やコーチを喜ばせるためにプレイするようになると、関係性は破綻し、必ず限界を迎える。



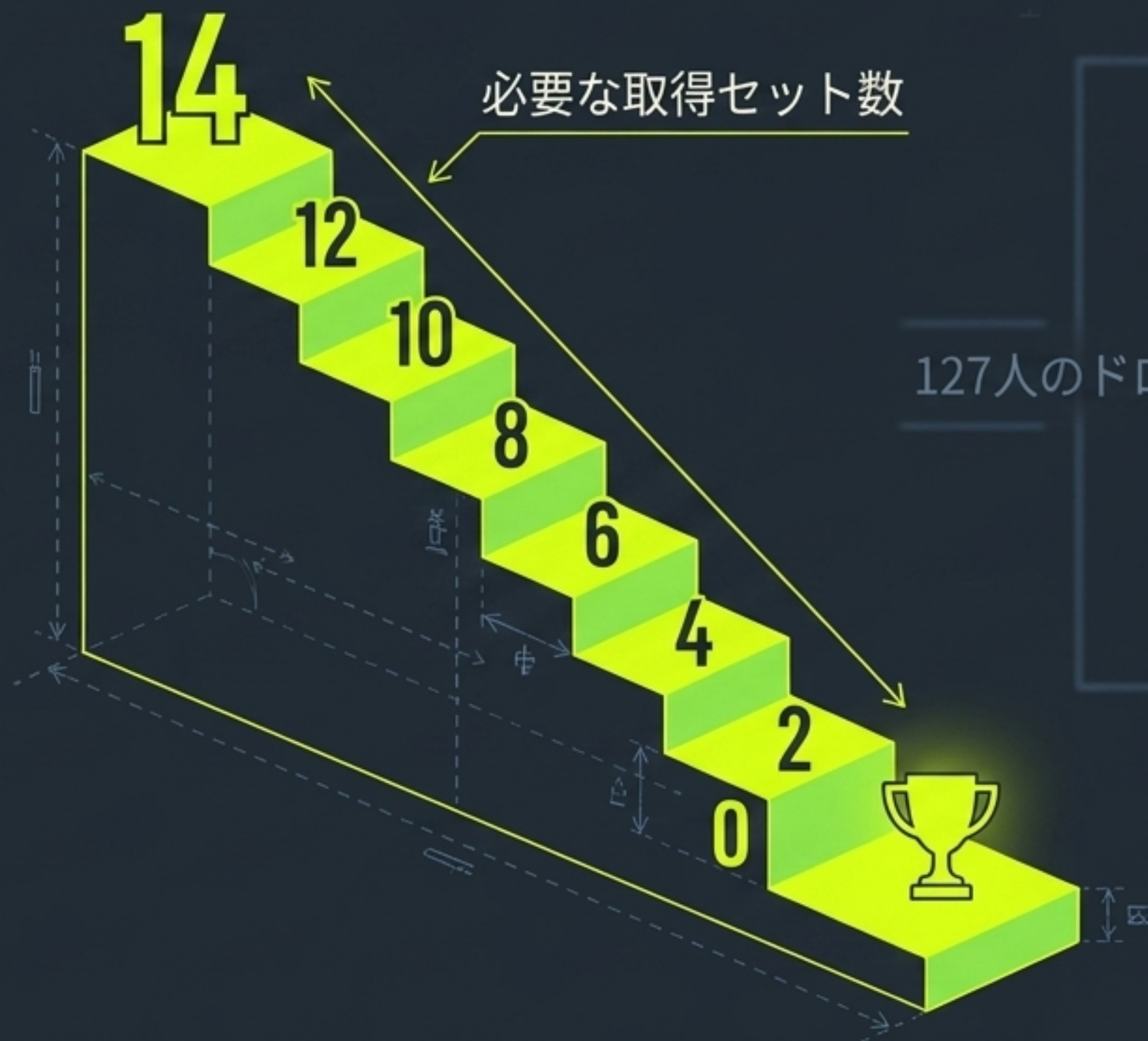
頂点から逆算する「8週間前」のピーキング

ターゲットとなる大舞台の「8週間前」から計画を始動し、徐々にコンディションのピークを合わせていくマクロ管理術。
直前の週は実戦を避け、脳をクリアな状態に保ち、本番ではひたすら「1試合勝つこと」のみに集中する。



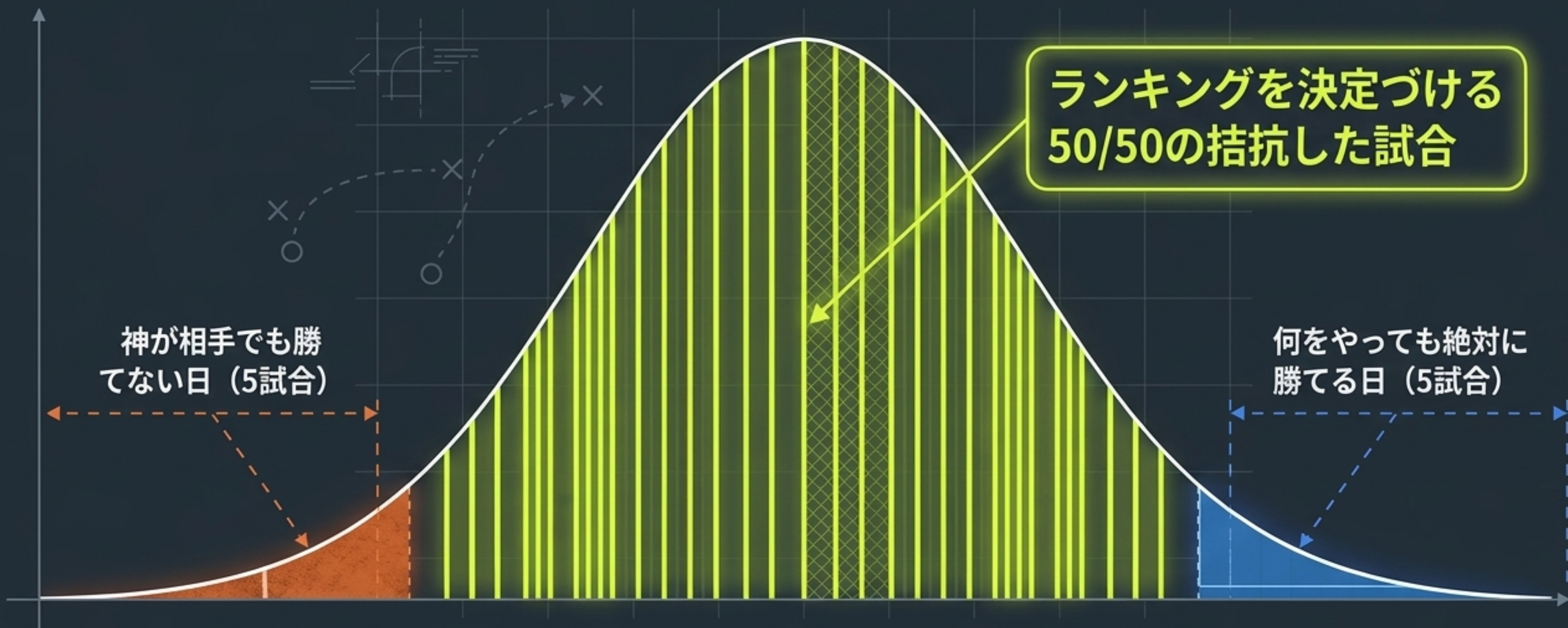
重圧を排除する「カウントダウン・モデル」

「127人を倒して優勝する」という途方もない全体像を意識する必要はない。コーチの頭の中にあるのは「セット数を逆算して数えること」だけだ。目前の相手と必要なセットの消化のみに焦点を絞ることで、過剰な重圧から思考を切り離す。



シーズンを決定づける「50/50」の戦い

年間を通じて、どんなに頑張っても勝てない試合が5試合、逆に何もしなくても勝てる試合が5試合存在する。キャリアやランキングを形作るのは、その間に存在する勝率50/50の試合をいかに拾うかである。



プレイブックの終着点

戦略、データ、過酷なトレーニングはすべて、本番で「頭を空っぽにして目の前の1セットに没入する」ための準備に過ぎない。



最高のプレイヤーは、不格好に勝つ術を知っている。
最高のリーダーは、自身の勝利ではなく、相手が自らの力で夢に到達するための「適応のプロセス」を創り出す。